

私の5歳

塩冶節子（広島県高校原爆被爆教職員の会会員）

突然の閃光と同時に私は、闇に閉じ込められた。頭上から差し込んだ一筋の光。そこから母の手が伸びてきて私は助けられた。父は広島市郊外の発電所に勤務していて不在。わが家は比治山のそばの電車通りの近くにあり、目の前に広がった光景は家が消え、向こうから火の手が近づいてくるのが見えた。足早に比治山に向かう人々。全身焼けただれて歩いている人の群れは、建物疎開をしていた生徒ではなかったかと。

私は比治山の登り口に腰を下ろし、前方の空に広がったきこ雲を見た。夕方、家族を捜していた父と会えた。8月6日の夜は比治山の植え込みで野宿した。「お母さん」と、か細い女人の声がずっと聞こえてきたが、翌朝、母からその人の死を知らされた。7日は多聞院に避難した。そこで仲良しのあきちゃんの死を聞いた。

5歳の私に刻まれた衝撃的な事実は今も私から離れない。坂発電所の社宅に移り翌年、私は1年生に入学した、2年生の朝の教室で「クレヨンみたいな血を吐いて亡くなった」と言う被爆した朝子ちゃんの死を知らされた。私の妹の悦子も2歳で被爆し9歳の秋、高熱で翌日亡くなった。看護師をしていた母は「何で私が助けることができなかったのか」と悔やんでいた。

病名も分からず慰霊碑に名前も載っていない、突然、逝ってしまった子供たちの生命。それが戦争だということを、修学旅行生たちに語っている。原発事故で生活を脅かされている東北の子どもたちを思う。世界の動きは今、脱原発へと向かっている。ノーモアフクシマ！